



平成27年度「篠ノ井西中学校 学校通信」

発行日 平成27年5月8日

第4号(180号) 校内版

長野市立篠ノ井西中学校

電話(026)292-0244

FAX(026)292-7880

担当:教頭 中山



布施だより

《響き合う歌声づくり ～中庭コンサート～

いつく
人権を考える日 ～命を慈しむ日～ 》



今年の学校グランドデザインの重点のひとつに『響き合う歌声づくり』を位置づけています。学級で歌うひとりひとりの歌声が、学年で奏でられる大きな歌声につながり、全校生徒677名で響かせる大きな歌声となり、合唱に託した感動と想いが交流し合える、そんな場を共有していきたいと願っての重点です。

5月1日(金)に「中庭コンサート」が開催されました。淡いピンクと白の花をつけたハナミズキの咲く、1年で最も新鮮な空気をまとった中庭で歌声の交流が行われました。2学年諸君が『絆』を、3学年諸君は『心の中にきらめいて』をそれぞれ披露してくれました。1学年諸君は日差しが強くなった中庭で、じっとその歌声に耳を傾けていました。『響き合う歌声作り』に込めた願いに、「成就感・達成感・信頼感」があります。奏でられた歌声の美しさに、それまでのより良いものを追究するという達成感を仲間と味わいたい、歌声を通じて共にいることの信頼感を味わいたい、というものです。互いを尊重し合える眼差しが歌声に反映させることを願いつつ、最後に昭和50年(1975)に作られ、これまでずっと歌い継がれてきた『生徒会歌』を心ひとつにして全校生徒で歌いました。

～ ～ ～ ～ ～

この中庭コンサートに先だつての4月28日(火)は、篠ノ井西中学校にとって大切な『人権を考える日』でした。1.2時間目に生徒会主催の「人権集会」が西体育館で行われました。最初

に学校長から「人権を考える日」に寄せて講話がありました。

今から28年前の4月22日、当時、本校の2年生だった上原夕子さんが「この世の中にいじめがなくなりますように」という言葉を遺書に残し、自ら命を絶ちました。

今日の「人権を考える日」は、この過去のつらく悲しい出来事から、命の大切さや人権を尊ぶことの大切さを学び、今を生きる私たちが二度とこうした出来事が起きないように、いじめを絶対に許さない決意を新たにします。そして、誰もがよさが認められ、居場所がある学級、学年、学校づくりをしていくために、自分自身を見つめ直し、今、自分はどの行動すべきか考える日です。



まず、最初にこのことを心に刻んでください。

これから皆さんにお話しすることは、実際にあった出来事です。いじめに出会ったとき、どうすればいじめをなくせるか、今も私の心に強く刻まれていることをお話しします。

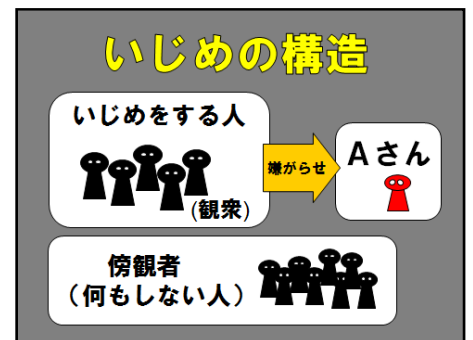
以前、ある中学校の、2年生のクラスでいじめがありました。いじめを受けた生徒は女子で、Aさんと仮に呼びます。Aさんに対するいじめがあったのは、Aさんの友達の3人の女子が担任の先生に相談に行ったからです。3人の女子からの話で、クラスで何が起きていたのかだんだん分かってきました。Aさんをいじめていたのは、クラスの複数の男子でした。具体的にどんなことをしていたかということ、Aさんとすれ違うときに変な声を出す。Aさんの方を見て、ヒソヒソと笑いながら何かを言い合う。掃除が終わった後、わざとAさんのイスだけ降ろさない。

こうした嫌がらせを、クラスの複数の男子がしていました。また、Aさんに対するいじめは小学校の時にもあって、クラスで何回か話し合いをして、しばらくの間、いじめはなくなるが、時間がたつと、また繰り返されていたということもわかりました。

先生に相談に行った3人は、先生に相談に行くかどうか、思い悩んだと思います。先生に言って解決できるだろうか？とか。先生に言ったことで、自分たちが何か言われたり、されたりするのではないかと。様々な思いがめぐっていたと思います。それでも、Aさんのために、訴えてくれました。その先生は、担任として、絶対にこのいじめはなくなさなければならないと強く思いました。そして、そのいじめを、どうやってなくしていけばいいのか、本当に悩んでいました。

結論を言うと、Aさんに対するいじめは、しばらくしてなくなりました。いじめが分かったのは1学期でしたが、2学期になり、3学期になっても、そして3年生になっても、Aさんに対するいじめは全くなくなりました。その先生は、心配だったので時々Aさんの様子について、訴えてきた3人に聞きましたが、その度に「先生、もう大丈夫です」と答えてくれました。いじめは完全に解決されました。

Aさんに対するいじめが解決できた訳は何だったのでしょうか。このことについて触れる前に、3人が訴えてくる前、クラスはAさんに関わってどんな状態になっていたのかということ、右の構造になっていたのです。そのクラスの人には「Aさんに対していじめをする人」と、それに対して何も行動しない「傍観者」に分かれていました。いじめの「観衆」という立場もありますが、「いじめをする人」の中に含まれます。いじめを見てはやし立てたり、おもしろがったりする人は、まさに「いじめをする人」です。いじめの起きているクラスは必ずこうなっています。こうしたクラスにいる人は、必ずこの中のいずれかの立場になっています。これを「いじめの構造」といいます。



「いじめをする人」「傍観者」と、ひとくくりにしましたが、同じ立場でも、人によって意識が違います。Aさんのクラスの人たちは、こんな意識でした。最初にいじめをする人の意識ですが、「Aさんにやられる理由がある。だから、やられて当然。」「たいしたことをしていない。」

「みんながしているから。」さらに「よくないと思っているけど、友だちがやっているから。」次に傍観者の意識ですが、「あれぐらいならたいしたことない。」Aさんのつらさに気づかない人です。「自分には関係ない。」無関心になっている人「いじめはよくない。でも、Aさんは友だちじゃないし……。」さらにこんな意識の人もありました。「Aさんがかわいそうだ。やめさせたい。でも……」「どうしていいかわからない。」「自分が何か言っても変わらない。」「何か言ったら、自

分がやられる。」

同じ立場でも、このように、心の中は様々でした。でも、心の中はどうであれ、よくないと思っ
ていてもいじめ行為をすれば「いじめをする人」です。Aさんの気持ちに寄り添って、やめさ
せたいと思っ
ていても、何も行動しなければ「傍観者」です。

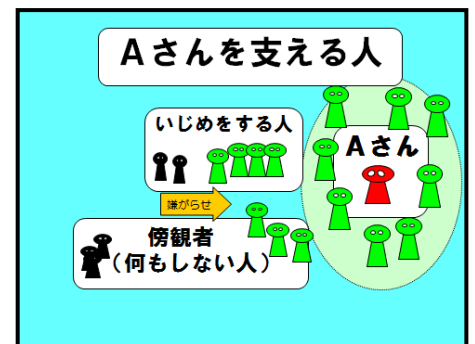
このいじめの構造は、第3者から見たものです。当事者から見ると違ったように感じます。い
じめを受けていたAさんは、どのように感じていたか。Aさんにとっ
ては、いじめている人も傍観者も、全く同じ存在です。いじ
め行為もつらいですが、誰も自分を助けてくれない、誰も自分の
ことを心配してくれない、こうした、自分はたった一人である、
という孤独な状況は、いじめの行為以上につらいことです。Aさん
からすると、いじめをする人も、傍観者も自分を苦しめている
同じ存在なのです。

さて、Aさんに対するいじめがなくなった「一番の理由」は何
だったと思いますか？「先生が、いじめている人を厳しく注意し
たから。」これは違います。いじめている人を厳しく注意しただ
けで、いじめを完全に解決するのは、難しいです。いじめる側は、嫌がらせをしたのは、相手の
せいだと必ず言います。また、いじめているという意識や、罪の意識がまったくないことがほと
んどです。よく聞くのは「ふざけていただけ」という言い訳です。ですから、なかなか反省する
ことができません。



では、いじめがなくなった「一番の理由」は、いったい何だったと思いますか？

一言で言えば「いじめの構造」がなくなったからです。どういうことかという
と、傍観者が支える人になったということです。傍観者の立場にいた、やめさ
せたいと考えていた生徒が、こんなふうに、Aさんを支える人
に変わっていったからです。そして、次第に、つられていじめ
をしていた生徒がいじめ行為をしなくなりました。やがて、い
じめの構造は跡形もなくなりました。



こうして、Aさんに対するいじめは完全に解決されました。

「傍観者」が、「支える人」に変わっていったといいましたが、
「傍観者」と「支える人」の違いは、何でしょうか？それは、
行動するかどうかです。このクラスでは「傍観者」だった生徒
が、どんな行動をしたかという。まず「3人の女子が、生徒
同士で、Aさんのことについて相談した。」これがAさんを支える最初の行動でした。そして、
「先生に相談した。」これが2番目の支える行動でした。さらに「仲間にはたらきかけ、支える
仲間を増やしていった。」仲間に話してみると、同じ気持ちでいた人が、何人もいました。そし
て、「Aさんを一人にしないように、いつも行動をともにした。」Aさんを嫌がらせの行為から守
るためでした。その後、最初の3人の女子以外の生徒が、「掃除が終わった後、一つだけ降ろさ
れていなかったAさんのイスを下ろしました。」いじめている男子が見ている中、大変な勇気が
必要だったと思います。このように、勇気を持って行動すること、それが「支える人」になる
ということです。

私は、この出来事で、いろいろなことを感じました。ひとつは、いじめをなくすには傍観者の
力が絶対に必要であるということです。そして、もうひとつは、いじめのあるクラスは、全員が
ダメになるということです。いじめられている人はもちろんのこと、いじめている人も、傍観者
も全員です。いじめは、そのクラス全員をだめにします。クラス全体が殺伐とした空気に包まれ、
誰もが仲間を信頼しなくなり、みんな自分のことだけを考えるようになります。当然、クラスは
バラバラになっていきます。

Aさんのクラスもそうなりかけていました。しかし、Aさんのクラスはいじめを解決してから
大きく変わりました。クラス全体に暖かい空気が流れ、一人一人が明るくなりました。そして、
一人一人が互いを思いやるようになりました。クラスがまとまり、みんな一つ一つの目標に向かっ
て力を合わせるようになりました。そして、一人一人が自分のよさを伸ばせるようになったので
す。

今日は、いじめを解決するために、先生は何をしたのかについては触れませんでした。簡単
に言うと、「傍観者を、Aさんを支える側に変えるために、力を尽くした」ということです。先
生たちの力だけで、いじめを完全に解決することは困難です。先生たちと皆さんが力を合わせる
ことが、絶対に必要です。

もし、これから皆さんがいじめに出会ったら、どうすればよいか。傍観者の立場にいるのであれば、「傍観者から、支える人になる」ということです。具体的には、まず仲間同士で「あれは、おかしい」と声にあげる。大人力を借りる。(先生に相談する。)先生力も借りて、支える側の仲間を増やす。そして、仲間とともに行動に移す。いじめを受ける立場だったら「あなたは何も悪くありません。我慢をしてはいけません。先生でも、家の人でも、友だちでも、とにかく誰かに訴えてください。」

皆さんに、最後の問いです。「今、自分の周りにいじめはないか?」「もしいじめがあるとしたら、自分はどの立場か?」「自分は、今、何をすべきか?」

上原夕子さんがなくなった年、その時の生徒会長に、本校の初代校長の竹内隆夫先生から手紙が届いたそうです。その中にこんなことが書かれていました。

～例えば掃除中、真面目に働いている仲間の側で平気でおしゃべりをしているようでは、仲間への思いやりが足りません。そういう生活が改まらなければ、本当の意味で、いじめがなくなったとは言えないと思います。～

**自分は
今、何をすべきか?**

この投げかけを受けて、生徒諸君は「一人ひとりの人権宣言」について考えを巡らせ、メッセージカードを書き入れます。そして体育館で全校集会を終えた生徒たちは学級に戻って、そのメッセージカードを基に「学級の人権宣言」を考えます。1年生の教室の追究の様子です。



司会の生徒はグループ学習で、「学級の人権宣言」をみんなの話し合いで創り出すべく考えを交流させようとしますが、なかなか追究が深まりません。(でも、ちゃんと呟いているんですね。「支える人になる。」「キーワードは差別やいじめをなくすこと。」「傍観者にならないように。」・・・等々。前の時間、全校集会で身につけた言葉をちゃんと口にしています。やっぱり、このボソボソと呟くやりとりがいいです。) そんな呟きがなかなか話し合いの核にならず散漫になってしまいます。しびれを切らしてしまった司会の生徒は決まろうとします。(これも、学級会でよく目にする光景です。)

でも知らず知らずの内に「傍観者」になってしまっていた集団を先生が諫めます。「もっと想像力を働かせてください。判断力を身につけてください。先ほどのグループの話し合いで傍観者になってしまっている仲間が何人もいましたよ。それはいじめの場面だけじゃないんだよ。自分は関係ないって表情の人がいました。内容も大切ですけど、みんなが考えて、みんなが決めたことにしてほしいんですよ。この『学級の人権宣言』は。」

先生の一喝を受けて再び、決まります。生徒たちの表情が、挙手の角度が違ってきます。傍観者ではなく、手を挙げて行動することで、話し合いに真っ直ぐに参加し、話し合いを支えようとする変化が現れた瞬間でした。



ひとりひとりの生徒にとって、そして私たち大人自身にとって〈命を慈しむ〉ためのかけがえのない時間を過ごした4月28日(火)でした。